

## 別紙 2

### 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 大橋 義武

周知の通り中国近代文学は、五四新文化運動をきっかけに、口語文が主流となる過程で形成されたものである。そのプロセスにおいて、前近代に書かれた著名な「白話小説」（『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』、『紅樓夢』など）が、口語体に近く、近代文学の先駆的存在とされ、カノン（経典）と見なされていった。

本論文「中国旧小説カノン形成における文学史観のはたらき——民国時期における旧白話小説評価の実態」は、そのカノン形成の過程を、当時の教科書や文学史研究を材料に、詳細に解き明かす。それとともに、中国の近代知識人が、近代文学を目ざす上で、どのような文学観を基礎にして、前近代白話小説を評価していたのか、実際にはあまり高い評価がなされなかったのはなぜか、具体的に「白話小説」のテキストと彼らの評論に分け入りながら、緻密に検討する。著者によれば、そこには、白話小説に対する「継承」と「断絶」の意識が窺われ、その伝奇的虚構性に対する、「排除」と「包摂」の論理が隠されているという。このように、中国近代知識人にとって小説とは何か、という議論にも通ずる奥行きをもった根本的な問題提起を本論文は行っている。

論文は、序章・終章に挟まれて、7つの章に分けられているが、叙述の流れに沿って、その内容を概括しておこう。

「文学革命」の発端において旧白話小説は、民間に広まった「活きた文学」として評価されるが、内容については、思想的悪影響があることなどが指摘され、文学革命を促進した雑誌『新青年』誌上でも、評価をめぐって論争が起きた。結局、旧白話小説に対しては、口語文体の使用という点に絞って価値が認められることとなった（第1章）。しかし、別の面から見ると、旧白話小説は学校における国語教育とも関わり、教材として教科書に取り入れられた。本論文は当時の国語教科書などを丹念に調査し、選択採用された作品と文章を細かく吟味している（第2章）。

五四新文化運動を経て、文学概論や文芸辞典などが出版され、当時の知識人

たちは一定の小説の概念を創りあげていく。このなかで新文学は、「人の文学」つまり「人生を描写する写實的ノヴェル」を強調したため、旧白話小説は、思想的伝統からは「排除」される傾向にあった（第3章）。また清末の梁啓超による「小説論」や、『紅樓夢評論』を著して独自の批評を加えた王国維なども、本論文では取り上げられている。ただ、清末の小説論は、白話小説の「発見」を導いたとはいえ、白話小説を包括的に評価したものとは言えなかった、と著者は指摘する（第4章）。

教科書とともに、カノンに「包摂」されていく過程で見逃すことができないのは、文学史の形成とそこにおける旧白話小説の扱いである。「文学史」が登場し、白話小説はそこに吸収されることとなった。同時に、高等教育制度の整備とともに、文学史のカリキュラムが定着し、全体として、白話小説を含む前近代の文学が、系統的に議論されていく土壤が生まれた（第5章）。

そのなかで、魯迅と胡適の果たした役割は、後世に影響を与えたという意味でも、際だっている。魯迅は、文学史の歴史性と小説の文学性を重んじて、一次資料収集から着手し、小説史研究に尽力した。進化論に影響されつつ「通史」の形成に寄与し、描写や想像力に力点を置いた。彼は、口語・文語にとらわれず、文学性の観点から、文語の唐代伝奇小説を高く評価し、科挙に惑わされる知識人を描いた『儒林外史』、男女関係をテーマとしつつ、当時の社会を描写した『金瓶梅』にも、遠慮なく肯定的評価を与えているという。その意味で魯迅の『中国小説史略』などの業績は、いまでも規範的研究として参照されている（第6章）。他方、胡適は自ら信奉する進化論に基づき、『白話文学史』や『国語文学史』を著した。彼は言語としての口語文を軸に、近代と前近代との、小説の「断絶」よりも「継承」を強調した。その背景には、一般的な現代口語（国民的共通語）の形成を目ざしていたことが挙げられるという。文学は「最大多数の国民に普及しうることを一大本領とすべきだ」からである（第7章）。

終章において、著者は、白話小説がカノンとして、国語教科書や文学史に取り入れられ、近代文化に「包摂」されるとともに、思想的内容的な、荒唐無稽さやエロティシズムなどが槍玉に挙げられ、「排除」の論理も強かったと概括する。これについては、各章でもそれぞれ触れられているように、中国近代文学が写實的リアリズムを重視し、西洋文学で言う「ノヴェル」をモデルとしたため、想像力を逞しくさせ、物語性を重視する「ロマンス」的な要素が、排除されてしまったことに一因があると結論づけている。

以上、本論文の概容を述べてきた。本論文は、中国白話文学が、近代文学形

成の途上にあつて、どのような働きをし、近代文学との関係において、どう位置づけられてきたのかについて、極めて精緻な実証的検討を加えたものである。個別の論においても、旧白話小説の教育研究への取り込みなどについて、日中を含めて、これだけ詳細な研究は未だなかったと言えよう。また中国近代文学が、現在まで抱えてきた、写実へのある種の「偏向」を浮かびあがらせ、それとは異なる視角を有した魯迅の小説史の意味を明らかにした点も高く評価できる。

そうした評価を承認した上で、本論文には、なおいくつか改善すべき問題点が残ることも、指摘せざるをえない。第一に、カノン形成の「包摂」過程に含まれる教科書や文学史著作の記述と、白話小説「排除」の評価を通じて、近代文学の「偏差」を論じた記述が、うまく融合せず論点が明確に接合していない。第二に、近代文学の「偏差」を論じた部分に、「ノヴェル」「ロマンス」とともに「実（写実）」と「奇（伝奇）」という概念が使われているが、これらの概念は、やや曖昧ではっきりしない。また文言小説や近代白話小説があるため、タイトルに「旧小説」と「旧白話小説」が併出することになった点は、やや違和感が残る。第三に、日本近代文学の形成において、実と奇の課題は、中国と比較してどうであったか、少しく言及があつて然るべきである。第四に、魯迅のみが特殊な文学史観から、白話小説を論じていたことになるが、これを胡適の事例と対比的に論じることで、その文学史観の個性を浮き彫りにすることが、方法としてはより適切ではなかったか。これらは今後の研究のなかで深めるべき課題でもあろう。

そうした問題点が残るにしても、旧白話小説の近代における運命を探求し、そのなかから近代中国文学の一つの「弱点」ともいうべき特質を、緻密な論証をもって整合的に解明した貢献は、十分に博士論文に値するものであり、審査委員会として、博士（学術）の学位の授与を提案するものである。